

せいさい

アブラナ科：イラク南部～アラビア半島

栽培暦

月 旬	7			8			9			10			11			12		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
主 な 作 業							○			■								
							○			■			■			■		
							播種			間引き			防除			収穫		
							種			き除			き除耕			除種		
	○			■									(高冷地早出し)					
	○			■														

■栽培のポイント

1. 播種期の早晩限界を守ること。
2. 根こぶ病の防除対策を行うこと。
3. 間引きは生育に合わせて適期に行うこと。
4. 肥切れによる収穫物の小型化を避けるため、施肥に注意すること。

■特性

温度 発芽適温は15～35℃で、この温度範囲では吸水種子は1～3日で発芽する。生育適温は18～20度で、25℃以上の高温化では生育が劣り、病害にも弱くなる。低温には強く、-2～-3でも越冬するが、雪腐れには弱い。

土壌 土壌は特に選ばないが、肥沃な土壌が適しており、酸性土ではpH 5.5～6.5に改良して作付する。

抽だい 長日条件で花芽分化し、高温長日によって抽だい・開花が促進される。花芽分化の限界日長は11時間前後のようである。

■品種・種子量 山形せいさい a 当り 60 ml。

播種期 せいさいは前述のとおり低温性の野菜であり、平均気温が20度以上の時期では高温による生育停止やウィルスが多発して収穫不能になる。通常、平坦部では8月25日頃が早播きの限界で、9月7日頃が晩限である。

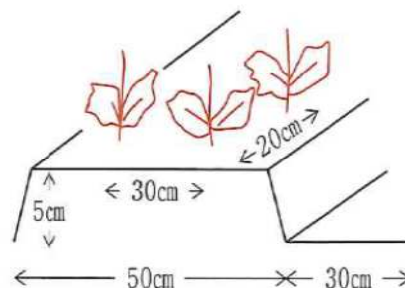
高冷地では8月5日頃から播種し、子株での早出しが可能である。

施肥例

(a 当り)

うねつくり

肥料名	基肥	追肥	備考
完熟堆肥	300kg	—kg	●前作の残肥の多少により基肥を加減する。 ●追肥は第2回間引き後(4~5葉期)に行い、生育状況を見て量を加減する。 成分量 窒素 2.0 kg 磷酸 1.8 加里 1.6
苦土石灰	12	—	
ホーソ入りそさい2号	8	—	
燐硝安加里 S604	—	2	



施肥量 窒素 1.1 kg、磷酸 1.3 kg、加里 1.4 kgを標準として、果菜類の後作などの場合には残効により加減して施用する。

全量基肥を基本とするが、肥切れは花芽分化を早め、収穫物を小さくするので、肥沃畑を選び、肥効の続かない畑では追肥する。

栽植密度 通常、平うねで、うね幅 40~50 cmの1条すじ播きとするが、地下水位が高いところでは、10~15 cm程度の高うねにする。播種後、種が隠れる程度に土をかけ、軽く鎮圧し乾燥を防ぐ。土壌の乾燥は発芽・生育不良をまねくので、極度に乾燥している場合には播種前に、十分かん水してから種を播く。

間引き 生育の特に早いものや遅いもの、また厚播きで混んでいるところを主体に健全な株を残し第1回目は2~3葉期、2回目は4~5葉期に行い、最終的に株間を15 cm程度に調整する。

追肥・中耕 第2回目の間引き後に、生育の状況を見ながら追肥する。追肥量は窒素成分でa当り0.3 kg程度を施し除草も兼ねて中耕する。

■**病害虫の発生** 病害では、根こぶ病、べと病、黒斑病、白斑病など細菌では軟腐病が発生する。特に根こぶ病については排水対策、pH矯正、輪作に注意して発病を抑制する。軟腐病は早播き(高温で)発生しやすい。

害虫では、アブラムシ、アオムシ、コナガなどが発生する。害虫による食害痕は軟腐病菌等の侵入口にもなるので初期防除を重視する。

■**収穫** 収穫は晴天日の午前中に地際部から刈り倒し夕方まで乾燥させ、ややしなやかにした後、に収納し、調整結束を行う。

収量はa当り500 kg。